

茨木市立北中学校 全国学力・学習状況調査分析結果

令和4年 10月作成

【今年度の結果と取組みについて】

〇●国語●〇

(領域ごと)	
①言葉の特徴や使い方に関する事項	概ね良好な結果であった
②情報の扱い方に関する事項	概ね良好な結果であった
③我が国の言語文化に関する事項	概ね良好な結果であった
④話すこと・聞くこと	概ね良好な結果であった
③書くこと	概ね良好な結果であった
④読むこと	概ね良好な結果であった
(問題形式)	
①選択式	概ね良好な結果であった
②短答式	概ね良好な結果であった
③記述式	概ね良好な結果であった
(無解答率)	概ね良好な結果であった
(その他)	学校の特徴的なことについて記入 ・最も正答率の高かった設問は、行書の書き方を問うものだった。 ・表現技法を答える設問は、大変良好な結果であった。 ・記述式の問題形式では概ね無解答率が高かった。

分析
領域ごとには各観点とも「概ね良好な結果」であった。学習課題に対して真面目に向き合い、継続的に取り組んできた日々の学習活動が、結果に結びついたと考えられる。文学的な文章中の表現技法を問う設問は、繰り返し授業の中で触れていたものであり、短答式という問題形式でもあり、大変良好な結果であった。 一方、三題出題された記述式の問題形式の中の二題では、全国的な傾向でもあるが、概ね正答率が低く、無解答率も高かった。この二題は記述の条件が二つ提示されており、誤答の多くはこの条件を読み取れなかったものと思われる。また、無解答率も二問とも課題が残る結果であり、始めから取り組むことを諦めてしまうような姿勢に対しては、改善できるよう取り組む必要がある。 「書くこと」を厭わない姿勢を身に付けるということを念頭に置き、今後の学習展開を行っていくことを課題としたい。

(領域ごと)

- | | |
|---------|-------------|
| ①数と式 | 概ね良好な結果であった |
| ②図形 | 概ね良好な結果であった |
| ③関数 | 概ね良好な結果であった |
| ④データの活用 | 良好な結果であった |

(問題形式)

- | | |
|------|-------------|
| ①選択式 | 概ね良好な結果であった |
| ②短答式 | 概ね良好な結果であった |
| ③記述式 | 概ね良好な結果であった |

(無解答率)

概ね良好な結果であった

(その他)

- ・もともと正答率の高かった設問
→ 5 多数の観察や多数回の試行によって得られる確率の意味を理解している。
- ・もともと正答率の低かった設問
→ 9 (2) 筋道を立てて考え、事柄が成り立つ理由を説明することができる。
- ・もともと無解答率の高かった設問
→ 9 (2) 筋道を立てて考え、事柄が成り立つ理由を説明することができる。
- ・もともと無解答率の低かった設問など
→ 3 反例の意味を理解している。ほか4, 5

分析

領域について、データの活用に関しては「良好な結果」であった。関数の領域が1年次から課題があり、苦手意識をもつ生徒も多いが、他の領域と同様に「概ね良好な結果」であった。授業内での『学び合い』や、授業の中で確認テストを取り入れることで、知識の定着や技能の向上が成果として出ている。また、最後まで粘り強く問題に向かうことや無解答をなくすことに取り組んできた成果が現れている。

課題としては、数学的な考え方を活用する問題を苦手としていることがあげられる。『学び合い』を継続して取り入れ、自分の考えを他者に伝えられるようにし、伝えたことを文にできるよう指導していくことで、記述問題に対しての苦手意識をなくしていきたい。

理科

(領域ごと)

- | | |
|--------|---------------|
| ①エネルギー | 概ね良好な結果であった |
| ②粒子 | やや課題が残る結果であった |
| ③生命 | 概ね良好な結果であった |
| ④地球 | 概ね良好な結果であった |

(問題形式)

- | | |
|------|-------------|
| ①選択式 | 概ね良好な結果であった |
| ②短答式 | 概ね良好な結果であった |
| ③記述式 | 概ね良好な結果であった |

(無解答率)

概ね良好な結果であった

(その他)

・もっとも正答率の高かった設問

1(2) タッチパネルの反応に水が関係しているかを調べるために、変える条件と変えない条件を適切に設定した実験操作の組み合わせの選択

・もっとも正答率の低かった設問

5(1) おもりに働く重力と釣り合う力の矢印を選択し、その力について説明した文の選択

・もっとも無解答率の高かった設問

5(3) 考察の妥当性を高めるために、測定範囲と刻み幅をどのように調整して測定点を増やすかを説明した文の記述

・もっとも無解答率の低かった設問

1(1)(2), 2(1)(2)(3), 3(1)(2), 5(1)(2), 選択式設問の無解答率が低かった

分析

粒子の領域での思考・判断が要求される選択形式の問題で、正答率が低かった。資料の読み取りや判断を行う際の基本的な知識の習得や文章を読み取る力などに課題を持つ生徒が多かった。一方で、短答式の設問に関しては、比較的良好な結果だったことや、普段の定期テストなどもふまえると、一定程度定着していることがうかがえた。選択式の正答率に課題があるものの、記述式の正答率が以前より改善が見られた。記述する上で大切な、「キーワードをしっかりと押さえ、簡潔に明確に伝える文章の構成力」を生徒に育むことで、さらに改善がすすむと考えられる。

〇●経年比較●〇

全体的な傾向についての分析

平均正答率は、国語と数学の合計で、過去5年間で最も高くなった。また、無解答率は、過去5年間の無解答率の平均と同等程度の結果となった。

このことから、学校全体の学力は上昇傾向にあるといえる。

学力高位層と学力低位層、エンパワー層についての分析

学力高位層の割合は、過去5年間の平均を上回った。また、学力低位層とエンパワー層の割合は、過去5年間で最も少なくなった。

このことから、学校全体の学力は上昇傾向にあるといえる。

〇●取組み●〇

学力向上に関する取組み

授業力の向上

(1) 年3回の授業力向上研修

「全員が参加し『学び』が保障された授業」を目指し、教職員全体で研究を進める。

(2) 全教員授業参観交流

全教員が校内で授業を公開、たがいに参観し、「思考力(じっくり考える力)、表現力(正しく相手に伝える力)の育成」に焦点を当て、授業改善に努める。

(3) 教科会議

時間割内に教科会議の時間を設けて、年間を通じて教科内の連携を深め、より深い授業研究を目指す。

自学自習の改善

(1) 計画的な宿題

各教科、テスト前に集中して宿題を課すのではなく、定期的に着実に力をつけるように課す。

(2) 一人一台端末の活用

ミライシードやMicrosoft teams を活用して、生徒一人一人に応じた課題設定の研究を進めて、主体的に学習に取り組む態度を育める学習環境の構築を目標とする。

保幼小中連携

(1) 小中授業実践項目

中学校入学後の子どもの不適応予防、学力向上のため、小中で授業の基本的な流れを統一していく。

(2) 保幼小中連携カリキュラム

校区全体として、「目標に向かって最後まで努力できる子どもを育てる」を目標に、学習指導で「つながり力」「ゆめ力」、生活指導で「自己管理能力」「伝達力」、教科指導で「書く力」「論理的思考」をそれぞれの発達段階の応じたステップを定めて、保幼小中で連携して育成を進めていく。

(3) 保幼小中合同研修、保幼小中合同授業研修

校区全体で統一されたテーマを、各校園所で研究し、合同研修にて交流、進行状況の確認、修正を行う。